

『祝6. 15共同宣言』9周年記念講演 〈記録集〉

【演題】

「日朝関係の原点」

—教科書に載らない日朝・日韓近代史—

【講師】： 石坂 浩一（いしざか こういち）氏

《プロフィール》

- ・ 1958年生まれ。
- ・ 立教大学異文化コミュニケーション学部 准教授
- ・ 専攻は韓国社会論、日韓日朝関係史専攻。
- ・ 主な著書
『北朝鮮を知るための51章』
（編著、明石書店）
『北朝鮮は、いま』
（監訳、岩波書店）
『トーキング コリアンシネマ』
（凱風社）など多数。

- 現在は、「日朝国交正常化連絡会」の事務局長として、活躍されています。

- ◆ 開催日時 2009年10月15日(木) 18:30 開演
- ◆ 開催場所 岡山国際交流センター 2階国際会議場
- ◇ 主催 日本と南北朝鮮との友好を進める会

目 次

| | |
|--------|---|
| 講演レジュメ | 1 |
| 開会あいさつ | 4 |

講演レジュメ

| | |
|--|----|
| はじめに | 9 |
| ハルバースタムの朝鮮戦争についての著作が問う教訓 単なる「マッカーサーの陰謀」ではなく、米国人（社会）の朝鮮に対する構造的偏見と国内政治への影響を看破。 日本はどうなのか！ | |
| 1) 基本的歴史認識の方法 | 11 |
| ①他律性史観と内在的發展論 植民地支配を正当化しようとした他律性史観・停滞史観 古代史の歪曲 任那日本府など 「朝鮮はみずから発展する能力がない」 日本の研究者の努力 旗田巍／梶村秀樹 | |
| ②「嫌韓」という歴史の繰り返し 植民地時代からのあらゆる偏見・歪曲の蒸し返し 韓国だけでなく朝鮮民族全体への侮蔑 自分たちが韓国（朝鮮）をわかっているという傲慢 | |
| 2) 近代のまちがった出会い | 13 |
| ①江華島条約 1875 江華島事件 日本の軍艦による計画的挑発→開国の強要 1876 不平等条約の締結～日朝修好条約 治外法権 / 関税自主権なし 欧米にされたことを朝鮮に押し付ける | |
| ②ゆがめられた朝鮮認識 自由民権派の認識 1885 大阪事件 「日本人により朝鮮で改革を断行して、日清間の緊張を高め、日本国民の関心を高めて日本の政治を変えよう」 民権派も朝鮮の主体性を認識できず 福沢諭吉 1884. 12 甲申事変 福沢が関係した金玉均らがクーデターに失敗 福沢は武器を提供するなど深く関与 勢力圏に置くことを狙う | |

『時事新報』は朝鮮への介入、清国との開戦を主張し一時発行禁止に
→クーデター失敗で朝鮮を罵倒

「無気力、無定見」「妖魔悪鬼」

脱亜論へ進む

1885, 3 「脱亜論」

日本は国土はアジアにあっても精神は西洋 不幸な隣人と付き合うまい
朝鮮を自己の影響下に置こうと画策し、失敗すると一転して露骨に「脱亜」

3) 強圧と侵略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

①日清戦争

1894. 7. 23 朝鮮王宮を占領し戦争協力を強要

日本軍出動、景福宮占領、国王を拘禁

清軍一掃を依頼させ戦争に協力させるため

7. 25 豊島沖開戦

朝鮮半島が主要な戦場に

日本軍、東学農民戦争を弾圧、農民を虐殺

1895. 10. 7 明成皇后（日本では閔妃と呼称）を日本公使館員らが虐殺

②日露戦争

1904. 2. 8 日露戦争開始

2. 23 日韓議定書 朝鮮内の軍事行動、土地収用

8. 22 第一次日韓協約 財政・外交顧問

1905. 11. 17 第二次日韓協約（保護条約） 外交権剥奪、統監府設置
義兵闘争、抵抗運動を弾圧

1910. 8. 29 韓国併合

③「竹島」の併合

1877. 3. 29 太政官指令書 「竹島外一島 関係これなき」

明治政府の地図に竹島・松島（現竹島）なし

明治政府は独島を朝鮮領土と認識していた

1900 大韓帝国、勅令41号で石島（現独島）を行政範囲として確認
日露開戦の切迫で日本政府が見解を変更

1905. 1. 28 日本政府、閣議で竹島編入決定 官報告示もなし

2. 22 竹島、島根県に編入→「竹島の日」に

4) 植民地化から戦争動員へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

①土地調査事業と在日朝鮮人の形成

1912～18 土地調査事業所有権確定

課税確立地主的土地所有強化、農民の土地喪失

武断統治による植民地支配

1919 三・一独立運動

②朝鮮人への収奪

1923. 9. 1 関東大震災と朝鮮人虐殺

軍隊・警察の責任はまだ問われたことがない

実態調査も不十分

③産米蔵植計画

1918 米騒動

日本の食糧難解決めざし朝鮮でコメ増産へ

↓

1920～34 産米増殖計画

増産した以上に輸出が増加

④戦争動員

*労働動員

1939 朝鮮から戦時労働動員（いわゆる強制連行）開始

1942 官斡旋方式へ

1944 国民徴用令適用

日本だけで約70万人

総体的強制性に基づく戦時労働動員

民族差別 現員徴用

*軍事動員

1938 陸軍特別志願兵令

1943 海軍特別志願兵令

1942 朝鮮人徴兵を閣議決定

正規兵約12万人、軍属や学徒兵含めれば約40万人動員

約2万人が死亡、ヤスクニへ

1940. 2. 11 創氏改名実施

*女性の動員

軍「慰安婦」

その人数も明らかでない

むすび・・ 24

1944 建国同盟の組織

呂運亨らの独立準備

中国での上海臨時政府の武装闘争準備

OSSの協力

ソ連での金日成部隊の待機

未完の日朝国交正常化

閉会あいさつ・・ 27

開会あいさつ

(司会 森本)

長らくお待たせをいたしましたけれども、これから祝6.15南北共同宣言の9周年記念講演会を開催させていただきたいと思います。

1日のお仕事を終えられまして、大変お疲れのところだと思いますけれども、それにもかかわらず貴重な時間をさいていただきまして、この会場に足をお運びいただきましたことを主催者として、あらためて心からお礼を申し上げたいと思いますし、日頃から日本と南北朝鮮との友好を進める会、これに対しましての暖かいご支援、あるいはご理解をいただきまして、多くの皆様のご協力によりまして、今年もこの講演会を開催することができましたことを、改めてお礼を申し上げておきたいと、このように思います。

本日の司会進行を担当させていただきます、進める会の事務局長を仰せつかっております、森本でございます。よろしくお願ひしたいと思ひます。

後ほど新しい代表が挨拶の中で触れられると思ひますけれども、この日本と南北朝鮮との友好を進める会を結成いたしまして、今年が10年という歴史的な大きな節目の年を迎えることができました。

この10年間、国際情勢はもとより、日朝間の問題も含めて紆余曲折がございましたけれども、愚直といひますか、真面目にといひますか、地味な活動ではありますけれども、毎年こうした講演会も含めまして、様々な活動を行ってまいりました。

そしてまず、何よりも皆さん方にご報告しておきたいと思ひますのは、この進める会、元々は日本と朝鮮の友好を進める会だったんですけれども、皆さんご承知のように歴史的な南北首脳会談、そうした気運も盛り上がってきたということも含めまして、南北ということであらためて名前を変えさせていただいた経過がございますけれども、この進める会の生みの親でもあり同時に、育ての親ということで、10年間私たちの運動の先頭をきって頑張っていたいただきました、井本丈夫前代表が今年で85歳という歳もございまして、若手にバトンを譲りたいということがございまして、新しく代表をとということで、若手のホープの一人でございます、三原誠介県会議員を新しい代表に就任していただきましたことも、ご紹介をしておきたいというふうにお思ひますし、井本前代表には閉会の挨拶で、時間の許す限り、存分にご挨拶をしていただけたらありがたいかなということ、前もって皆さん

方にご理解をいただきたいというふうに思います。

司会はあくまでも司会でございますので、多くを語る必要はありませんので、早速三原新代表の方から、皆さん方に対するご挨拶をさせていただきたいと、このように思います。よろしく申し上げます。

(拍手)

(三原新会長)

皆さん今晚は。

お忙しいところ多数お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今、進行役であります事務局長の森本のほうから紹介がありました、三原でございます。

今日はですね、この会が結成されまして、10周年を迎える年になります。

活動は、少し前になりますが、96年あたりから訪朝団を結成して、超党派で諸々の活動をしてきたという経緯はあるわけでございますが、そういった年に、こうして6.15共同宣言9周年記念講演を皆さんとともに開催出来ますことを喜びたいと思いますし、厚くお礼を申し上げます。

私は今ご紹介がありましたように、井本前代表から世代交代ということになってしまっていますが、バトンを渡されました、県会議員の三原でございます。

この10年間、そして前に言いましたようにそれに続く10年以上にわたる運動を力強く引っ張ってきていただきました。今日も参加されておりますけれども、諸先輩の活動、そして日朝との友好親善にかかわる思い、そういったものを大切にしながら微力ではありますが、役員一同の支援をいただき、そして心ある同志の皆様のご理解をいただきながら、運動を推進していく決意をしているところでございます。

さて、先頃の総選挙におきまして歴史的な政権交代がなりました。国民は経済の立て直しや雇用確保、年金、医療、介護など、将来へと続く社会制度の確かな対策づくり、少子化対策、教育の充実などに期待を込めまして、戦後初の選挙による本格的な政権交代を選択しました。

来年度におきまして、今まさに予算編成作業が進行しておりまして、前政権との連続性、あるいは新たな制度方針、国と地方との関係など様々な断面をみせながら、今日概算要求

が出揃うというところまでやっております。

迎える臨時国会あるいは通常国会の中で、我々が進めている運動にかかわる、東アジアの平和、日朝の国交回復、そして統一、在日同胞の権利拡大や権利擁護、そして朝鮮学校の公的支援などについて、アジアの一員である日本として、新たな外交方針が打ち出されることを信じております。

我々としてもこうして岡山の力、そして岡山の活動を契機として昨年結成されました、今日講師にお呼びしております、日朝国交正常化連絡会に結集する仲間とともに、政府に対し様々な働きかけを展開していくことも、視野にいれておかなければならないと思いません。

私たちは10月2日から6日まで、民主党連立政権樹立後初めて、日本のさきがけとして岡山県第11次日朝友好親善訪朝団を派遣しました。総勢14名で県議、市議、労働界、医師、そして民間など、政治関係あるいは労働関係、医療関係などの分野における交流と意見交換、あるいは現地視察を行ってまいりました。

特に、朝鮮対外文化連絡協会の副委員長である、国会の副議長となられました、ホンソワン女史が国会議事堂である万寿台議事堂において訪朝団全体を招待していただく、そういった栄誉によくすることができました。

予定時間を大幅に超える意見交換ができたこと、新たな歴史の1頁を開くことになったのではないかと、皆さんにご報告しておきたいと思えます。

その際、6者協議には復帰しないとのホンソワン、ソンオク女史からの意見表明がありましたが、時を同じくして中国の温家宝首相の訪朝があり、当時かたくなな両国の姿勢も伝わってきたと思えます。

先日の日中韓の首脳会談において、温家宝首相から日朝関係についても前向きな方向があるとの情報もあります。新たな政権の力強い、そして展望のある外交方針が打ち出せることを、皆さんとともに期待するものであります。

本日は繰り返すようではありますが、本当に結成10周年という大きな節目の講演会となりました。

講師に迎えましたのは、日朝国交正常化連絡会の事務局長であります、立教大学の准教授もされております、石坂浩一先生をお迎えしております。

標題にありますように、日朝関係の原点と題しましてご講演をいただきたいと思えます。

我々はあらためて歴史を振り返り、東アジアの一員として我々はどうすべきなのか、我々のあるべきスタンスはどうか、共に学習をしてみたいとそうに思います。

加えて、毎年県内で講演を行っております、金剛山歌劇団の公演についてであります。

月が変わります、11月6日午後6時半から、新装になりました倉敷市民会館におきまして、開催させていただく準備を今しておるところでございます。

今回我々は協力団体ということで、実行委員会と一体になりまして、公演を成功させようということで準備を進めているところでございます。

今日おこしの皆さんも、皆さんに声をかけていただき、多数の方のご来演をお待ちしております。

本公演会の開催にあたりまして、趣旨にご賛同いただいた団体、個人、事務所など、要項の裏にたくさんの協賛広告をいただいた皆様、そして準備をしていただいた方々に、あらためてお礼を申し上げて、開会の挨拶とします。

どうぞ、ご静聴いただきまして、忌憚のないご意見もいただければと思います。

今日はありがとうございました。

(拍手)

(司会 森本)

ありがとうございました。

それではこれからさっそく石坂先生の講演に入っていきたいと思っておりますけれども、その前にご紹介だけ一つしておきたいと思っておりますが、祝電が来ております。

「石坂浩一先生をお迎えしての、祝6.15共同宣言9周年記念講演会のご開催、誠にありがとうございます。本日までご参加の皆様にとって素晴らしい学びの機会となりますよう、心よりお祈り申し上げます。」

岡山県議会副議長 小田圭一さんからいただいておりますので、ご紹介をしておきたいと思っております。

それでは、講師の先生のプロフィール等につきましては、若干先程三原代表のほうからもありましたし、1頁めくっていただくところにプロフィールを簡単に書いておりますので、割愛をさせていただきたいと思っております。

その前にですね、今年の演題といいますか、日朝関係の原点ということで、教科書に載らない日朝日韓近代史というものを、あえて今回取り上げさせていただきました。

今迄第8回やってきたわけでありますけれども、1945年、日本が戦争に負けた以降から現代になるまでの関係につきましては、昨年のマスコミの関係も含めまして、講演会を重ねてまいりましたけれども、昨年の閉会の挨拶の時に、皆さんも昨年ご出席の方は記憶に新しいかと思えますけれども、鳥越・当時の代表代行のほうからあえて、36年間の植民地時代を含む近代史、これがほとんど日本人にわかっていない。同胞の皆さんは当然わかっておられることなただけけれども、日本人の我々は誰も教えてもらっていない。そのこともきちっと押さえていくことがこれからの日朝、あるいは日韓、あわせて朝鮮半島、朝鮮の民族の皆さん方との本当のスタートになれるのではないかということ、あえて閉会の挨拶で鳥越先生に述べていただきました。

そのことを踏まえて今回は、耳障りになるかもわかりません。マスコミの皆さんもおられますし、あるいは各政党の皆さんもおられるわけですから、ちょっと耳痛いと思われる方もおられるかもわかりませんが、歴史を直視をするという勇氣、そしてそのことを共用化するという、そのことからまず私どもは、あらためてスタートしていく必要があるのではないかなど、そういう思いがございまして、あえて教科書に載らない、あるいは誰も教えてくれない、あえて教えてくれない、というようなことに踏み込んでいく必要があるのではないかという思いで、実は日朝関係の原点はここにあるということ、あらためておさらいをしたいということで、今日は石坂先生にあえてそのことをお願いをして、東京から来ていただいたということを講演の冒頭にご理解いただいて、先生の講演会に入っていきたいかなというふうに思います。

それでは先生、よろしく申し上げます。

はじめに

今晚は。石坂です。

本日は皆さんの意義深い会合、それも9回目という連続して継続されてこられた会にお招きしていただきまして、たいへん感謝しております。

同時に私ども、日朝国交正常化連絡会という形で昨年7月以降、ささやかながら全国の仲間とともに運動をするということで、活動を始めてまいりました。

そうした場合に、より多くの全国の仲間が結集してくれまして、あるいはそれぞれ独自の活動を報告して下さるということで、お互いに情報を交換しながら、共に手を携えて日本全体に運動を進めていくと、このようなことで岡山の皆さんも大きく協力していただきまして、あらためて感謝申し上げます。

そうしたことで、本日は日朝関係の原点というタイトルをいただきまして、タイトルというのは象徴的な言葉ですからもう少し詳しく言いますと、おそらく日朝関係の清算すべき歴史の原点、こういうことだろうと思います。

もう少し振り返ってみますと、たとえば江戸時代には、ここにいらっしゃる皆さんご存知だと思いますけれども、岡山は朝鮮通信使が通った通り道になっていて、そのいろいろな痕跡といますか、文化的な足跡も残っている。そういう意味では、そうした歴史の足跡をたどることもとても楽しいことであろうかと思えます。

そうした歴史があるにもかかわらず、しかし近代には不幸な歴史が生まれてしまう。そのことを今日、教科書に載らない歴史ということで、あらためて皆さんに問題を提供していければというふうに思っております。

最初に、「はじめに」ということで、挟み込んでありますレジュメに従って話を進めさせていただきます。

1週間位前に、今月の文藝春秋の広告と一緒に、ハルバースタムの朝鮮戦争についての著作の広告が出ました。「マッカーサーの陰謀」というコピーがついていまして、たまたま私は、これを『週刊読書人』から依頼を受けて事前に書評で読んでいたわけです。

変なコピーだと思いましたが、正直なところ。

ハルバースタムというのは、ベトナム戦争の時代をご存知の方はよくわかっておられる名前ですがけれども、ニューヨーク・タイムズの記者をして、アメリカのベトナム戦争に対する介入について非常に批判的に書いた人で、『ベスト・アンド・ブライテスト』というとても有名な著書があります。

もちろん反戦派というようなことではないんですけれども、しかしアメリカの誤った政策がベトナムへの戦争で多くのアメリカ人を不幸にしたと、このようなことを鋭く指摘してきた人で、ケネディは「あいつをニューヨーク・タイムズからやめさせろ」というふうに言ったと、そういういわくのあ

る人物です。

そのハルバースタムが最後に亡くなる前に残した著作が、この朝鮮戦争に関する著作で、本来のタイトルは『コールDEST・ウォー』、もっとも冷たい戦争という、こういうタイトルでした。

それが売らんかなということで、「マッカーサーの陰謀」などという宣伝文句にしたのですが、それにふさわしい内容が書いてあるわけではございません。

どういうことかといいますと、朝鮮戦争のときに、アメリカはやはりベトナムと同様に政策の過ちをおかした。そのアメリカのベトナムの原点が実は朝鮮戦争にあるんだという、そういうことがここに書かれております。

もう少し具体的に申し上げますと、細かいことは省略しますが、皆さんご存知のように、朝鮮戦争で米韓軍、アメリカ軍、韓国軍含めて国連軍です。38度線を突破してドンドン北に進撃していきます。そうして鴨緑江まで攻め上って全部我々がとるんだと、こういうようなことを目論んだがために、結局は中国がそれに対して朝鮮人民軍を支援するということになっていきます。

その時に、実はマッカーサーはアメリカの政府に対してもどこに対しても、「中国は絶対に介入してこないだろう、あいつらはそんなに強くないんだ」ということで、簡単に言えば侮っていたわけですね、中国人を。もちろん同時に朝鮮人に対しても侮っていました。

そうしてまったくそれに対して、対応を考えずにどんどん軍を北に進めます。そうすると、戦線がのびきっていきます。そこを中国の軍にたたかれて、結局は多大な犠牲を出すことになりました。結果としてもちろん朝鮮人、中国人も犠牲になりましたけれども、アメリカの市民たちもそこで兵士として多くが犠牲となりました。それなのにマッカーサー、そしてマッカーサーの取り巻きであった将軍たちは、自分の過ちを隠し、固定観念から抜け出そうとしません。そうした人々の問題点を鋭く描き出しているんです。

同時にこれは歴史の教訓的なことなんですが、そのマッカーサーの根拠のない主張に対して、当時トルーマン大統領もそれをあえて信じたわけです。

もちろん保守的な人ですから、トルーマンにもいろいろな問題があったわけですが、その重要な一つの要因、ハルバースタムも書いていますが、当時アメリカの民主党は長期政権でした。これは今とちがって、その前のルーズベルト大統領以来の長い民主党政権でした。死んでそのあとトルーマンが受け継ぎますが、その時に民主党政権が長く続いてきたので、共和党の側が非常にこれを不満に思っていて、なんとかして民主党のアカどもをたたいてやろうと、こういうふうになっていったわけです。それで皆さんもご存知のマッカーシズムというところに繋がっていきます。

そうしたマッカーシズムが動き始めていたような時期に、朝鮮戦争に繋がっております。

したがってアメリカのトルーマン政権も、マッカーサーのいうことをある意味信じたかった。共産主義に対して弱い姿勢の政権であるということ、言われたくないということで、トルーマンはマッ

カーサーの独走を許してしまった。そういうことがこの中に描き出されています。

私はこれを興味深く読んだんですが、今のアメリカ、今の日本と、実は教訓になるようなものがないだろうかと思つづく思いました。

拉致問題は解決されるべきことですが、拉致問題を口実にして、北朝鮮との間で本当に話し合わなくてはいけないことが見えなくされる。そういうような構造というのは、実は朝鮮戦争のアメリカ介入の時の構造と似ているんじゃないかと思いました。

ですから今の日本の新政権のもとで、やはり冷静に日朝の国交正常化を旨とした話し合いが行われることが求められているのだと思います。

ちなみに、ハルバースタムは朝鮮のことはあまりよくわかっていなかったようで、朝鮮人、あるいは韓国人に対しても、やや記述が不十分なところがありますけれども、興味深い本でありました。

そうしたことを前振りにしまして、今日は近代史についてお話を申し上げようと思うんですが、そこですね、最初に申し上げておくべきことは、基本的な歴史の認識の仕方ということだと思います。

1) 基本的歴史認識の方法

そこで1として、基本的歴史認識ということを挙げてあります。

かつて日本の明治政府から始まって、第二次世界大戦で敗戦にいたるまでの政府ですけれども、当然ながら植民地支配を正当化できるような、そういう論理を作ろうとしました。

それは、今から見れば誤ったものだとわかるわけですが、しかし当時はそれを正当化するために、いろいろ語られました。

その大きな一つが「朝鮮は停滞していて、日本が助けてやらないとやっていけない」という考え方でした。それを停滞性史観とか停滞史観、あるいは他律性史観というような言い方をしました。

例えば、『日本書紀』の中に、日本は朝鮮半島に勢力をのばして任那に日本府を置いたというふうなことも書かれていますけれども、それを事実として、日本の政権が朝鮮に大きく力を伸ばしたというような、確証されていないようなことを戦前の歴史では強く教えていたわけです。

任那日本府というのは、日本の勢力を示すものではなくて、一種の出張所とか、そうしたものでないかということで、いまだに歴史の学界では決着のついていないものであります。ですから、これをもって古代日本が朝鮮を支配していたということは、無理があるわけで、ましてや朝鮮半島のごく一部ですから無理があるわけですが、それがかつては、何か日本が朝鮮の上にあるかのように語るための根拠なわけです。

これは今から考えると、とても笑止千万なことではありますけれども、明治時代の経済学者の中には、たとえば朝鮮半島に視察に行って、「あっ、この国はいまだに平安時代のまぢだ」というようなことをまじめに論文に書いた、そういう学者もいました。

これはなんで平安時代かと言いますと、封建制がないというんですね。封建制は日本では中世と近世ですから、鎌倉時代から江戸幕府の時代のその発展が朝鮮では見られないから、したがって朝鮮半島というのはまだ平安時代の時期にあるんだと、こういうことをまじめに論文に書いた学者もいました。ですから、そうしたことをその人がどこまで本気で思っていたかというのは、また議論の対象にはなりますが、誤った見方にとらわれていたわけです。それを正すための努力というのは、1945年以降、戦後になってようやく日本の歴史学者の中でも行われました。

それが朝鮮史研究会の旗田巍先生とか、梶村秀樹先生といった、先輩達お二人とも亡くなられましたけれども、そうした人々の努力で克服されてきたわけです。

それが朝鮮自身の発展の力が当然ながらあるという内在的発展論です。どの国でもどの地域でも当然ながら発展する内部の力を持っているんだという、こういう考え方でございます。それを朝鮮史に当てはめて、朝鮮史をあらためて考えるということが、戦後の日本の研究者の責務でした。

ですからそういうことをみんな考えてきたわけですが、ところがそうした状況に対して、とても否定的な考え方を持つ一部の日本人もいるようです。それがよく言われる「嫌韓」といわれるような考え方にとてもよく表れているかと思えます。この「嫌韓」のいろいろな本が出ております。本屋に行くと、むしろまっとうな本よりもそうした本が多いという状況になっております。

よく読んでみますと、実質的にそこに出ていることは、植民地時代に語られていたような合理化、すなわち支配の合理化であって、事実を歪曲したりしているわけですが、そうした歪曲や偏見というものを蒸し返しているようなものになっております。

残念ながらこれでは合理的な歴史認識とは言えないわけです。「嫌韓」と言っていますけれども、もちろん韓国ではなくて朝鮮半島全体が、その侮蔑の対象になっていることも間違いありません。

しかしながらこれは、これまでの歴史の研究、日本の社会的な常識をまったく無視したものですので、そうした人々の考え方に振り回されないための私たち自身の知識が必要です。例えば、私たちの身近な人々が何かそうした本に惑わされそうな人がいたら、正しい認識をちゃんと伝えていけるような、私たちの基礎知識がきっと必要であろうと思えます。

「嫌韓」といわれる人たちは、自分達が韓国や朝鮮を全部知っているんだという、とても傲慢な姿勢を持っています。私たちが研究して、歴史の研究者が何年も勉強してもわからないことがたくさんあります。まだ議論の最中ということもたくさんございます。ですから、これは謙虚な姿勢で歴史に向かい合わなくてはいけないということだと思えます。

話がそれるようですけれども、皆さんこの会は慶州とか行かれましたか。韓国とかまだ行ってないですか。慶州ツアーとか行ってみると、きっと面白いと思えますけれども、慶州のいろいろな面白いところがありますが、その中でももっとも象徴的な、皆さんにお話しておきたいものに、石窟庵というのがございます。韓国に行かれた方を見た方もいらっしやると思えます。

石窟庵という名前のお通り、洞窟の中に仏様の仏像があるわけです。新羅のときに作られたもので、とても貴重なものなんですけれども、これにまつわる一つのエピソードを申し上げようかと思います。

日本が朝鮮半島を植民地にしたとき、当然ながら慶州にも行っています。そこでいろいろな発掘や研究といたしますか、見てまわりました。

石窟庵を見ると、そこに仏様がおさめられている。その洞窟の中、端っこをちょろちょろ、ちょろちょろ水が流れていたそうです。それで日本の学者たちは見て、「ああ、朝鮮人は水の管理も、湿度の管理もできない。こんなものをそのままにしておいたらきっと仏様がだめになってしまう、これを止めよう」ということになったんです。それで、止めてみたら中の洞窟が結露して露がおりるんですね。さんざん露が降りて、今度は逆に洞窟の中を管理できないようになってしまったんですね。

これは戦前の日本の歴史学者がとけなくて、戦後になって韓国の学者もいろいろ研究してようやくとけてきたわけなんですけれども、実はそのちょろちょろ流れていたのは、洞窟のなかの結露を流すための道だったんですね。

古代人はどのようにしてかはわかりませんが、そうした洞窟の中で生まれる露、水気をうまく流して、仏様をきちんと保存できるような仕組みというのを知っていたわけです。それは経験として、結果として知っていたのかもしれませんが、そうしたものがわかっている長年保存してきたものを、日本の植民地権力はわからなかったということです。

これはもちろん、近代の科学というもの一般が傲慢だったというふうに言えるかもしれませんが。石窟庵の仏様の話を聞きますと、ほんとうに古代の人々というのは、私たちがわからないような知恵をもっていたんだということを感じます。新羅はそうしたとてもすぐれた文化を持っていた、そうした国でありました。

したがって、私たちが少し古い歴史をたどっていても、とてもおもしろい。歴史を知るのそういうことがおもしろいわけなんですけれども、今の受験生たちは、覚えることだけが歴史だと思ってかわいそうなんです、そうではなくて、驚くようなことがいっぱいあるのが歴史の面白さです。

そうしたことを、新羅の都である慶州にいても知ることができます。そうした話をいっぱいしていると楽しいんですが、話が進まないのだから次に進みたいと思います。

2) 近代のまちがった出会い

やはり日朝関係といった時に、近代の出会いというのが、間違った出会いになってしまったということが、とても大きいことだと思います。細かいことは省略させていただきますけれども、これは日本の歴史の教科書にも比較的出ていることなんですけれども、日本の軍艦が計画的に朝鮮に対して挑発を行って開国を強要したという経緯がございました。

江華島という島があって、この島の近くに日本の雲揚号という軍艦が行きまして、そこでわざと挑

発をして、大砲を撃たせて、朝鮮側の大砲がとどかないというのがわかっていて、逆に日本側から攻撃をしかけて相手を打ち破る。その結果として「お前たちは何だ」と、「勝手に攻撃してきて、よくないじゃないか。開国しろ」というふうに、非常に無理難題をふっかけて条約を認めさせます。これがいわゆる江華島事件といわれるものです。

ちなみに江華島も古代から現代まで、とても歴史の宝庫のような地域です。江華島は島の中の交通アクセスが悪いので個人で行くのはむずかしくて、団体にフィールドワークに行くのにとっても適した場所ですので、これまた皆さん行ってみられるとおもしろいと思いますけれども、古代の遺跡とかもごぞいます。

話をもとに戻しますが、この江華島事件によって日本は朝鮮政府を圧迫して、結果として翌年日朝修好条規という不平等条約を結ばせることとなります。この条約を調印させた場所は練武堂という武道場です。この建物はその後、壊されてなくなったのですが、今再建してしまっていて、これからいくと多分2010年ぐらいには、再建されたものですが、見ることができると思います。

この不平等条約によって、日本はまさにアメリカをはじめとした欧米から押し付けられた治外法権や関税の自主権がないというそうした不合理を、今度は朝鮮に押し付けることになるわけです。こうして日本は、いわば朝鮮だけではなく、台湾、琉球、そうした諸地域に対して、圧迫政策をとっていくわけですが、特に朝鮮にはこうした強圧的な不平等条約の要求を記憶すべきです。

実はこの時に日本の明治政府も必ずしも、とても強かったというふうには言えません。結果として明治政府が生き残って、軍国主義を進めて行ったということですが、その時日本が大国になるということで、天皇制国家の侵略・膨張を国民に対して納得させていくというプロセスが、残念ながらありません。明治政府が成立しても専制であることは変わりありません。一般の民衆が生きられないんだから、民衆が生きられるような権利を与えろという要求を含んでいた自由民権運動というものも、こうした政府のイデオロギー的統制のもとで、一部がとても国家主義的な動きを示しました。

レジュメが、うっかりしまして、1885年としなければいけないのを1985となっております。その下の甲申事変もすみませんが、うっかり100年ずれてしまっておりますのでご訂正ください。みんな1800年代のことです。

大阪事件というのは、自由民権運動が政府の弾圧によって、かなり押さえ込まれて、その後、起死回生の策を練っていた時期のことです。大井憲太郎という人を中心にして進められた、この計画はとても合理的な説明ができないので、そこにあえて括弧をつけて説明をしましたが、朝鮮で日本人が改革を断行させて日朝間の緊張を高めて、つまり清国が朝鮮を牛耳っているから、俺たちが朝鮮を逆に改革して牛耳るようにして、今の政府の弱腰を変えさせて、その結果として日本国民も政治に関心が向くだろう。それで日本の政府を攻撃して変えようという、論理的とはとても思えないですけども、そうしたことを自由民権派の一部、特に急進派といわれた人々が考えてしまったんです。

いわば朝鮮人の主体性とか、朝鮮人自身がどうやってこの民族と国を保とうとしているかということとは、全然この発想の中にはございません。そうした日本人の思想的弱さが存在しました。この自由民権派の中で朝鮮との付き合い方とかに悩んだ人は、例えば中江兆民とかいう人もいますけれども、かならずしも多数派ではございませんでした。

これはよく言われることですがけれども、福沢諭吉のような日本の近代の先駆的な思想家と言われる人も、やはり朝鮮に対しての見方というのは、非常に侵略的なものがございました。

福沢と朝鮮の関わりというのは、よくいわれるのがこの1884年の甲申事変であります。

金玉均と書いてキム・オッキョンですがけれども、金玉均らが当時の宮廷の中でクーデターを起こして、権力を握ろうとするんですがけれども、それが失敗をしました。もともと日本が助けるんだというようなことを言っていたんですが、日本は結局助けきれずに、清国のバックアップを受けた当時の朝鮮国王が自分たちの権力を守りきるということになりました。

この時に福沢は武器を提供するなど、相当深くこの甲申事変に関わっております。この政変の結局の意図は、日本が朝鮮を自分たちの勢力圏に置きたいということで、この辺は政府であっても、福沢であっても、実はそれほど違わなかったからです。

しかし、『時事新報』はこうした強硬姿勢がうまくいかなくなっていくと、今度は清国と対決して朝鮮をめぐる争おうという、とても好戦的な主張を繰り広げるようになります。そして、清国と戦争も辞さずに戦えと、こういうようなことを主張しまして、一時は明治政府からも発行禁止を受けているというような状況になっています。

クーデターが失敗すると、ますます朝鮮人に対する不信感を深めて、そこに書いてあるのは一例ですがけれども、「無気力、無定見」な人々とか、あるいは「妖魔悪鬼」、これはなにか妖怪のようだと朝鮮民族を罵るということになってしまいます。

その結果出てきたのが、レジュメの2頁目の「脱亜論」というものです。結局、実は今まで説明したことでもおわかりだと思いますけれども、「脱亜論」になって急に福沢諭吉が変わったわけではないわけですね。

むしろその前から朝鮮半島を自分たちの勢力圏に置きたいという、こういう発想があって、その中から金玉均たちを支援していたわけですから、何か義侠心があって、無私の志をもっていたというわけではございません。

このように1885年の3月に出てきた「脱亜論」という言葉が、実際に言葉として顕在化したから大きく取り上げられて、教科書にも載るようになっていたりしております。その内容というのはよく知られておりますけれども、日本はたとえ国土はアジアにあっても精神的には西洋なんだ。しかしまわりのアジアの国々というのは非常に不幸な連中で、こうした人々はいまだに遅れた考え方にとらわれている。そうした人々とはもう付き合わないで、その人たちは自分たちの従える相手としていこうと、こ

のような考え方を示したのが「脱亜論」です。

いわば明治の思想家たちの考えというか、当時の政治状況に非常に左右されていたということをよく物語っている、それが「脱亜論」でありますけれども、それが福沢諭吉のような日本の近代を象徴する人と言われる、考え方の中にも見られるわけです。これは残念なことではございますけれども、歴史的な事実であります。

3) 強圧と侵略

日本はこのようにして朝鮮と不幸な出会いをいたしました。そしてその後、一層の侵略というものを進めて行くこととなります。その経過は強圧と侵略というところとなります。

まず上げなければいけないのは日清戦争ですが、日清戦争を語るときにやはり大切な点は、日清戦争というのは多くは朝鮮で戦われたということですね。これは、日清戦争というと日本と清国の戦争。名前はまさにそうですから。日本が戦場になったのではないんだということは、およそ日本の教科書でもみんな知っている。多分子供たちもわかっていると思います。しかし、日清戦争というのは実は、特に当初の時期は、朝鮮半島でしばしば戦ったんだということ。これは、小学校あたりで子供たちに聞くとおそらくよくわからない。じゃあ、なぜ朝鮮だったの、というふうに言うだろうと思います。

実は日清戦争というのは、朝鮮での日本軍の行動をはずしては考えられないものです。まず戦争のために、日本軍は朝鮮の王宮を占領して、国王に戦争に協力しろということを強要しております。

これは本当に今日のタイトルにあるように、教科書に出てこない話なんですけれども、日本軍が出勤して、ソウルの歴史、旧跡観光のコースでは、必ず入ることになりますけれども、景福宮というところがあります。景福宮というのは、朝鮮の王宮の中でも一番中心的な王宮ですので、そこがメインなわけですが、そのメインの王宮を占領して、そこで国王を拘禁して、日本の軍事行動に協力しなさいということを認めさせたわけです。そうして日本は、朝鮮半島に一部滞留していた清国の軍隊を一掃して、自分たちが錦の御旗を取るための口実を、朝鮮のほうから得ようとしたわけです。

ほかにもたとえば、日清戦争の初期の戦いで成歎の戦いというのがあります。ソウルから多分車で行けば1時間半かそれぐらいだと思いますけれども、これもまぎれもなく朝鮮半島の中で戦われた戦争です。最初は清国軍を朝鮮半島から一掃するために、日本軍が朝鮮半島で戦争しているわけです。

やがて戦線を北に押し上げていくわけですが、そうした陸上での戦闘はとて朝鮮における戦争ということをは語ることができません。豊島沖海戦がございまして、日本は日清戦争で戦争の勝利ということを得ていくわけですが、それと平行して日本軍は、日本の侵略を防ごうと立ち上がった農民軍を弾圧し、その農民たちを相当数虐殺したわけです。

これは奈良女子大学の中塚 明先生という方が、王宮占領から立ち上がった農民にたいする弾圧・虐殺にいたるまでの経過を本に書かれていますので、読むことができます。そのようなことがあって、

日本は日清戦争を戦ったわけですから、実は日清戦争というのは朝鮮であった戦争だということを、私たちは肝に銘じなければいけないだと思います。

日本はいったん清国に対して戦争に勝つわけですけれども、現実には朝鮮民族は日本の思うとおりににはなりませんので、日本のソウルにあった公使館は非常にあせります。そこで、あの国王の王妃を排除すれば国王は自分たちの言うことを聞くようになるのではないかと、国王のお父さんを担ぎ出して日本が有利な状況を勝ち取れるのではないかと、そうしたことでおこしたのが朝鮮の明成皇后の虐殺事件です。この人を日本では閔妃と呼んで、出来事は閔妃虐殺事件とっています。

これも教科書で一部書かれているんだと思いますが、やや昔よりも書かれている教科書が減ったかなという気もいたしますが、教科書に出ていない事実ではございません。朝鮮では明成皇后というふうと呼んで、近代史では欠かせない名前ですので、韓国でミュージカルなども作られています。

最近でも韓国で明成皇后を主役にした映画が作られておりまして、それはある種の歴史のメロドラマなんですけれども、それほど韓国人であれば誰でも知っているということです。もちろん北でも歴史の中で名だたる名前だろうと思います。

こうして明成皇后に対する、日本の公使館員らによる虐殺事件というものが行われます。今、景福宮というのは常に改修を加えていて、いつ行っても工事をしているんですけども、今年の春ぐらいだったかに、この明成皇后が虐殺された部分の建物が復元されました。

ですから景福宮をこれから皆さんが訪問されますと、一番奥までいかないと見られませんが、そこでこの明成皇后の殺された場所というのがおおよそ特定されて、その場所にかつてあった建物というのが復元されていますので、ご覧になることができます。

日本は続いて日露戦争というものを戦いました。日露戦争は朝鮮に対する自分たちの支配権を得ようということで行われた戦争ですので、やはり朝鮮と切り離すことができません。1904年、ちょうど日清戦争から10年後ですけれども、日露戦争が始まると、日本の政府はまた朝鮮の国王に対して軍事行動を起こして、日韓議定書という形で、日本の朝鮮内での軍事的行動を認めさせるようになります。結局、日清戦争の時と同じようなことをしているわけです。そして軍隊が進出して行って、そこで土地を利用していく。そうしたことを認めさせることになります。

さらに第一次日韓協約という形で、これはその次の保護国化の準備段階ですけれども、日本が推薦した財政外交顧問をおいて、その指導のもとに政治をしろというふうに、このときは大韓帝国というふうに国名が変わっておりますので、大韓帝国政府に強要しているわけです。

そうして結ばれたのが1905年の第二次日韓協約。俗に保護条約と言われているものです。それによって大韓帝国の政府は外交権を奪われて、朝鮮の政治全般について統監府というものがおかれて、その統監府の指導のもとで政治をしなさいということにされてしまいます。この初代統監になったのが他ならぬ伊藤博文であります。

そうしてこのような日本の侵略行為に対して、当然ながら朝鮮の人々は抗議をし、戦っていきます。ある人々は義兵闘争というような形で、これは儒教の学者たちなどが中心になって、地域の自分たちの影響のある一般大衆を集めて、武装闘争を行ったり、あるいは様々な啓発的な運動を行ったり、言動を通じた運動を行なったりいたします。

数多く弾圧されて、義兵闘争ではたくさんの方が死んでいるということが、これは日本の記録を見てもわかりますけれども、そうした抵抗を振り切って、1910年に朝鮮の植民地化、韓国併合ということが行われるわけです。

来年2010年というのは、この朝鮮の植民地化、韓国併合からちょうど100年目ということになります。今、いろいろなところでそれに向けた行事、運動・活動というものが準備され、提起され始めておりますけれども、いわば日朝の国交正常化というようなことも、少なくともこの植民地化から100年という年には、何らかの前進を勝ち取りたいというようなことが、今われわれが、国交正常化連絡会が行っている趣旨でもあるわけです。

ところでですね、これは非常に問題中の問題といえますか、大変な問題であるわけですが、竹島についても、一言申し上げておきたいと思います。これは日本の政府の公式的な見解とは異なる話になりますけれども、竹島の問題は必ずしも日本と韓国の対立というふうにとらえるとよろしくないんじゃないかというような話をします。

というのは、日本の歴史研究者は竹島が日本の固有の領土であるというふうには、多く考えてきませんでした。きませんでしたから、客観的な研究者は、日韓の対立というよりは、非常に一部の人とそうじゃない人との対立ではないかなと、そういう考えをもっております。そのことを少し歴史的事実に沿って申し上げておこうと思います。

実は1877年、明治維新が1868年ですから、それからほどない時期ですけれども、この時に竹島というのがいったいどちらに属するのかということで、問い合わせが明治政府に寄せられました。それで何か見解を出さなければいけないだろうということで、これまでの江戸幕府の事例等をあらためて調べて、この時に明治政府の太政官指令書という、見解文が出されています。ここに「竹島外一島」は日本ではないと明記されています。

実は問題なのは、日本側も朝鮮側もそうなんですけれども、島の名前がその時によって公式文書でも変わってしまうんですね。ここでいう「竹島」というのは、実は今の竹島を指しているのではなくて、鬱陵島のことで、「外一島」のほうが今日の竹島ですが、指令書では両方とも日本にとって「本邦関係これなき」と記されています。ちょっとそのややこしいところは省略させていただきますが、明治政府はこの時点で、鬱陵島とともに竹島を日本領土としない認識を示しています。

これは今の日本の外務省のホームページの固有領土という主張では、まったく触れられていないことです。しかしこの指令書が実際にございますので、外務省はこれについて説明する責任を負ってい

と思います。明治政府がこの太政官の見解を出した後に作った地図においては、日本の領土を示す地図の中に竹島・松島は含まれていません。この「松島」というのが今の竹島です。竹島がその時によって名前が変わりますが、ここで「竹島」と書かれているのは鬱陵島のほうです。鬱陵島は今日間違いなく韓国の領土ということにされております。

このように日本政府の地図に竹島はございません。明治政府は基本的に今日韓国でいう独島を朝鮮領土というふうに認識していたということが、この太政官見解からもその他の公書からも見て取ることができます。そうして1900年に大韓帝国は勅令41号で、「石島」について確認します。鬱陵島を中心にした鬱陵郡という郡をあらためて確認して、その中にこの石島が入っていると書いています。この時は勅令の中で「石島」と書かれていますけれども、これが現在の韓国でいう独島、日本でいう竹島です。こういう勅令が文書で残っております。

このようなことがあったわけですが、そしてそれを日本政府も知っていたわけですが、日露戦争が切迫してくると、軍部の中で、実はあの島はロシアと戦争する時に持っているとは有利なものではないかと、このような考え方が出てまいります。そのためにこの竹島を日本の領土であるというふうにしてしまおうという考え方が亀おこってまいります。

細かいことは省略いたしますけれども、そうした過程を経て1905年1月28日、日本政府は閣議決定で竹島の編入ということをしてしまいます。これに関して官報の告示もございませんでした。そして2月22日に竹島が島根県に編入され、これが現在の「竹島の日」になっているわけでございます。

しかし、少なくとも今、日本の外務省が言っている固有領土論というのは、事実と異なるのではないかと思います。それは太政官指令書がございますので、もしずっと固有の領土だったということを説明するのであれば、これについての何らかの申し開きが必要だからです。

竹島の問題については、前近代、江戸時代、あるいはそれ以前にいろんな話がございまして。それについて韓国側も、日本側もいろんなことを主張しておりますけれども、これは島根大学の内藤正中先生という方が非常によく研究されています。韓国のあるジャーナリスト、韓国日報の論説委員をしているファン・ヨンシクさんという人は、いわば前近代、まだお互いの国境とか近代国民国家が成立していない時代の何かはっきりした理由、はっきりした見解、文書があれば別ですが、そういうものがないところについて、そこを水掛け論的になぞってもあまり深い意味はないんじゃないかと述べています。ファンさんは、基本的に1900年の大韓帝国の勅令、1905年の日本の閣議決定、そしてその後のサンフランシスコ平和条約、この3点で問題をとらえれば、近代国家と領土という意味での問題の整理としては十分なのではないかというふうに言っています。私も同感です。

いずれにしろ、日本の歴史研究者の中では、竹島が日本の固有領土であるというのは必ずしも主流の見解ではないということを申し上げました。ここで日露戦争の話の後に述べたというのは当然ながら意味があるわけですね。1905年11月に、日本は大韓帝国の外交権というものを剥奪して、すでに露骨

に干渉する体制になっていたわけです。したがってその年の1月に日本が閣議決定をして、それに対して大韓帝国の政府が何らかの抗議をするような、そういう状態ではなかったということです。

やはり竹島の問題という、その固有領土であるかどうかその問題とは離れて、そのプロセス自体はやはり、日本の朝鮮半島に対する侵略の一部分だったというふうにいわざるをえないと考えられます。

4) 植民地から戦争動員へ

そして、三つ目の項目に進もうと思います。植民地化から戦争動員ということです。

これは比較的市民運動の中でも多く問題にしましたし、それなりに知られてきたことですので、皆さんご存知のことが少なくないかと思います。日本が1910年に朝鮮を植民地化して以降です。日本の統治機構として朝鮮総督府というものが置かれました。総督府は朝鮮を統治するためにいろいろな統治の政策を実行しましたが、そのことの初期の大きな政策が土地調査事業と言われるものでした。

1912年から1918年にかけて土地調査事業を行ない、収税体系を確定するという作業を行いました。

これは近代的な国家として一般的にどこでも実行する作業ではありましたが、それによってそれまで実質的にその土地を利用し占有して耕していた農民たちが、ある時から、「ここはお前たちの土地ではない」ということで、土地登録をしなかったために耕作する権利を失って、追い立てられることがしばしば起こりました。

そして、この土地所有権の確立によって課税の方法が確立されて、日本人の地主も生まれますし、地主の土地所有が広く確立されていって、その中で多くの農民が苦しい立場におかれるようになっていくわけです。

これが在日朝鮮人をはじめとした在外朝鮮人が生まれていく大きなきっかけになります。同時にこうした強圧的な土地調査事業、多くの土地を失う人々の発生によって、武断統治という強圧的な統治にもかかわらず、1919年に3・1独立運動が起こりました。その背景に、この土地調査事業というものが存在していたわけです。

3・1独立運動というのは、ソウルのパゴダ公園で宣言文を読み上げて、人々が立ち上がってデモをしたというふうにいわれますけれども、パゴダ公園のレリーフを見ましても、朝鮮の全土で多くの人がデモンストレーションを行い、自分たちの民族独立を主張したということが描き出されています。このように全民族をあげての闘いでした。それはやはり日本の統治政策の生み出した結果であったわけです。

植民地支配の結果としてまだ1910年代には少なかった在日朝鮮人がどんどんと増えていくことになります。②のところに書いておきましても、まだ日本が果たしていない歴史的な責任として記憶しなければいけないこととして、1923年9月1日に関東大震災が起こり、その後の過程で朝鮮人虐殺が起こった事実があります。

この虐殺された人々をひとくちに6千人とよくいってききましたけれども、やや重複などがあって、6千人を上限とするような、もうすこし少ない数だろうというふうに、この頃いろいろ実証してみると言われています。いずれにしろ、いまだにその亡くなった人たちの数さえもよくわかりません。みなさんも一般的に、朝鮮人が毒を井戸に投げた、何か暴動を起こしたというような噂がたって、その結果として日本人が朝鮮人を殺すようになったと、このようにお聞きになっていると思います。しかし、それだけでなく日本の軍隊と警察がそうした不確かなデマをむしろ拡大したり、人々をあおる結果になったというようなことも、今までの研究で明らかにされております。

実際に朝鮮人を虐殺してしまったということで、末端の一般市民は幾分か裁判にかけています。まったく裁判がなかったというわけではないんですけども、しかしその人たちも間もなく出てきます。刑もとても軽い刑でした。そうした一般の人々の行動ももちろんですが、人々をとらえていた当時のものの考え方ということがひとつ重大な問題ですし、さらには、この大地震という大きな災害の混乱の中で、人々をそうした虐殺に追い立てるような状況を作ってしまった日本の軍隊や警察はどうやって、亡くなった人々に対して責任をとるのかということが、21世紀の今日、まったく未解決です。

むしろ強制連行については、少なくとも徴用の形になって以降は、日本政府も一応の責任を認めているようではありますが、関東大震災については、いまだに日本政府の責任ということは、一度も語られていないのではないかと思います。私の知っている限りでも、東京でこの問題をもう一度、日本の責任として考えようという運動が少し動き始めていますけれども、やはりこれも併合から100年ということで、あらためて考えておくべき課題になるのではないかと思います。これは特に岡山の皆さんというより、われわれ関東に住んでいる人間の課題かなというふうに思います。

そして朝鮮ではこの時に産米増殖計画というものが行われました。1918年に、日本でよくご存知の米騒動、一般大衆が米をよこせと言って蔵を開けさせるという運動がおこるわけですが、このときに日本政府は食糧難の解決をめざして、朝鮮で米を作ろうと考えるんです。

実際に、第一次、第二次を含めて、1920年から34年にかけて産米増殖計画というものが行われます。

ところがこの計画をやっている途中に、よく言われるように世界的な恐慌により日本にも大不況がやってきて、人々は農村から離農したり、食っていけなくてどんどんと都市に、最下層の人々として流れています。そういう悲惨な事態になっていく時代でした。

したがって、途中で朝鮮における米の増産は、非常に厳しいものになるわけですが、統治政策上、簡単にやめるわけにもいかず、日本の支配政策の中でいろいろな紆余曲折を経ながら、34年まで公式的に行われました。

問題なのは、確かに米の生産は増えましたけれども、そこで増産した米はみな日本に送られてしまって、作った朝鮮農民の口には入らなかったということです。いわば日本のために朝鮮の農民は米を

作らされた。その米は日本人の口に入る。もちろん日本の一般大衆はそれほど楽な生活をしていただけではないですけども、しかし、日本の労働者層のために、朝鮮米が安価な米として日本に輸出されていったわけです。

そうした状況を経て戦争動員ということになります。

一般的に強制連行と呼ばれてきた動員政策があります。これを右側の人たち、保守的な人たちが、強制連行というのは、畑で働いている人をばんばんつかまえてトラックに乗せていったのをイメージさせるけど、実際そういうものは多くなかったんだから、強制連行はなかったんだというような、そういう議論をするようになりました。

そうしたことから、言葉を厳密にもう一度考えようということで、歴史研究者のレベルでも全体を「戦時動員」と規定し、その中で労働動員、あるいは軍事、軍隊での動員、そして女性の動員という形でもっと論理化しようということが、行なわれてきています。

一般的に強制連行といわれてきたのは、やはり日本に向けての労働動員が多いと思われます。

これは1939年から始まりました。朝鮮から日本に対して当初は募集という形式をとっておりますけれども、実際は計画的にどの地域から何人ぐらいあげろと指定するわけです。そうして指定して、どれぐらいの人々を出せという各地域の役場に指示割当が行きます。そうするとそれを地域の役場は実行しなければいけないので、いろいろとかき集めて出している。結果としては、ほとんど強制とかわらないということがしばしば起こったわけです。

確かに一部では、もしかしたら日本に行ったら少しはいい暮らしができるのではないかと、思っていたという人ももちろんいます。しかし、経済的に困窮して朝鮮の農村で生きられないようなとても貧しい人々が、植民地支配の結果として作られてしまっていたという歴史的背景を抜きにしては、語ることはできません。経済的強制と経済的強制という言葉は昔はよく使っていましたが、まさに経済的強制にあたるといえます。本当に、もう農地もない、作柄も悪い、お米を作っても、畑を作っても、ろくな値段で売れない。そういう人たちがどうやって食っていくのか。もしかしたらこの募集というのに応じたら、まだ生きられるのではないかと、わらをもすがる思いでした。

また、動員する側も口ではいいことを言うわけです。「2年経ったら、帰ってこられるから」あるいは、「ちゃんと給料やる」とか。給料がある程度出たところもありますけども、ちゃんと送金されなかったこともありました。それもまたいろいろなんですけれども、しかし賃金も貰えなかったという話がしばしば伝えられています。

そうした形での戦時動員が1939年から始まりました。これは政府が決定して始め、割り当てていったことですから、私企業が朝鮮に行くと、A社は、「私はじゃあここに行く」、「じゃああなたはあっちに行ってください」というふうに、企業同士で決めてやったことではありません。そういうものとして行なえるものでもないんです。ですからこれについて、政府の責任ということ逃れるということ

は、ほとんど不可能であると思います。

この戦時労働動員は、1942年から官斡旋という形で、いわば官の側、当局の側の介入が強まり、結局国民徴用の適用ということになっていきます。日本に労働動員で来させられた人だけで約70万人というのは、日本の国会に提出された資料でおよそこの数字が出ているので、ミニマムとして問題がないだろうということでレジュメに書いてあります。それぐらいの人々が動員をされました。

また、さきほど強制連行という言葉が近年、研究者の間であまり使わなくなっていることに関連するわけですが、連行の過程だけが強制なのではないんですね。それは、ここにいる朝鮮民族の皆さんはよくわかるわけですがけれども、途中で逃げることもできない、そして誰かが「俺いやだ」と言っても断ることもできない。そういうものであるわけですね。そして、これはとてもしばしばあった話ですが、「募集」だといって行きます。2年だといわれて我慢して待っています。ところがそこで「現員徴用」がかかるのです。そこに書いてありますけれども、その働いている現場で「お前は今の職場から移動しないように指令が出た」と徴用令が適用されちゃうんです。だから国民徴用令で動員したというのは44年からだといいますけれども、朝鮮人だろうと、日本人であろうと、働いている現場で徴用をかけられるということは、すでに早くから起こっていたことで、44年以降に限りません。ですから、もう働いている現場で強制労働にされてしまっているわけです。

実はまだ、いわゆる強制連行、戦時労働動員というのは研究の余地がある部分ですがけれども、少なくとも「募集だから自由だ」というようなことは、とてもそんなナンセンスなことは言えない、そういう歴史的な事実が残っています。

そしてもう一つ見逃せないのが、民族差別ということです。それはどういうことかということ、じゃあ朝鮮民族を日本が動員したときに、どんな所に連れて行ったか。その答えは、一番劣悪な、日本人が労働力として不足している現場に、朝鮮民族が連れて行かれたわけですね。だから炭坑とか、鉱山とか、一番危険なところに行ったわけです。それは全国均等に連れて行ったというわけではありません。

例えば、東京の南の川崎に、日本鋼管という有名な会社があります。日本鋼管では当時、朝鮮から若い少年たちを募集して連れてきました。この時は、日本鋼管がある程度読み書きができて、技術というほどのものがなくても、自分たちが指示したことを実行して機械などもある程度動かしてくれる人を求めている、条件をつけました。そうやって連れてきたような場合には、多少炭坑や鉱山とは違ったところがありますけれども、それでも、熱や粉塵で劣悪この上ない労働現場でした。多くの場合、朝鮮人の戦時労働動員は、それよりもっとも劣悪で厳しい現場に放り込まれたということがございます。

そして軍事動員、これは朝鮮人が大日本帝国の軍人にされていったということです。1938年に陸軍特別志願兵令、43年に海軍でも同じように志願兵になることができるようになりますけれども、その

プロセスの中で、1942年に朝鮮人の徴兵というものが決定されて、43年からそれが実施されます。

今日は創氏改名についてはお話しませんが、創氏改名は1940年です。これを研究した宮田節子先生というわれわれの大先輩ですけれども、宮田先生も言っていますが、やはり朝鮮人の徴兵ということを念頭に、創氏改名を行なったのであろうと考えられます。

日本式の名字と名前という形で日本の軍隊に編入していく。これはやはり徴兵へのプロセスの一つとして、考えられていただろうと思われます。そうして正規兵として約12万人、軍属や学徒兵を含めれば約40万人という人が動員されたということです。約2万人が亡くなり、その人々は靖国神社に祀られています。これは報道などでも出ていますけれども、まだ生きている人たちが間違ってヤスクニ（靖国神社）に祀られていたとか、そういうようなことまでございました。

日本の支配動員政策ではさらに女性の動員ということで、これは軍隊の性奴隷というふうにも人権の見地から位置づけられた「慰安婦」という人々があります。

これはおそらく皆さんもご存知だと思っ、あえて詳しく書かなかったわけですが、やはり数万とか言われていますが、はっきりとした人数はわかりません。これについてももう少し日本の政府の中で、資料を調べるべきではないかと思っます。これまで防衛庁の中にある資料というのが、主として資料集などで出されてきましたけれども、もしもまだあるのであれば、当然ながら調べられる時にきているだろうというふうにも思われます。

むすび

このような侵略の歴史というのはちょっと重い。しかし一方で、侵略に対する抵抗、あるいはそこでの人々の生活を営み、そういう側面がございます。今日はとてもその負の側面について強調した話になりましたけれども、それに対するいろいろな人々の営みや抵抗があったんだということも、別な機会にぜひ学んでいただきたいと思っます。

このような厳しい植民地統治下のもとで、朝鮮の人々は様々な形で抵抗を続けていたということ、最後に申し上げようと思っます。

ひとつには1944年、建国同盟というものが朝鮮の中で地下組織として作られています。これを創設したのが、漢字で呂運亨と書く、ヨ・ウニョンらの活動です。それは主に国内に残っていた人々、民族主義者、社会主義者含めてですけれども、そうした人々の地下組織で、「もうじき日本の敗戦がくるだろう、その時にわれわれ朝鮮民族が準備しなくてどうするんだ」ということで、それを準備するために作ったんです。

このグループはやがて1945年の日本の敗戦後に建国準備委員会に発展して、9月に朝鮮人民共和国というものを立ち上げることになります。この人々の活動というのは、やはり地下組織ですから、わからないことも多いのですが、私がインタビューした、もう今は亡くなったお祖父ちゃんでしたけれ

ども、イ・ビョンウさんという方も記憶していました。その方から呂運亨たちがやっている建国同盟からの誘いがきて、呂運亨たちはやっぱり動いていたというような話を聞きました。日本の敗戦より1年ぐらい前からどうやって活動したのかなど、いろいろ不思議に思っていたことがあるんですけども、いろんなことがあったようです。

これは、ちょっと話が飛んでいってしまいますけれども、もう今韓国は民主化され、相当民主化が進んで昔のように政治犯、左翼囚の人はいなくなったわけですけども、しかしかつて、80年代ぐらいには学生運動をした人たちが牢屋に入って、昔の10年、20年、30年と牢屋に入っている左翼囚のお祖父ちゃんたちにあつたわけです。

そうすると、そこでいろいろな体験を聞き、出獄して社会にそれを伝えることになります。実は日本の植民地支配の末期に、ですからこの建国同盟とかあつた時代ですね、たとえば山の中で軍事訓練をして抵抗闘争をする準備をしていたんだそうです。そういうような話が長期囚のおじいさんの口から出たんだそうです。私はその話を聞いてとても驚きましたけれども、建国同盟というものがあつたんですから、そういうものが小規模ながらあつても、おかしくないのかなというふうに思いました。

そして、海外でもいろいろな動きがございました。これは韓国の人々が、民主派の人々を含めて、一つのよりどころとするところですけども、中国の上海に臨時政府がありました。この臨時政府を代表するのが、金九と書いてキム・グという人ですが、金九たちの臨時政府では武装闘争というものを準備していました。

これは後にアメリカでC I Aになるんですが、O S Sという機関の協力を受けて、いずれ朝鮮に飛行機で行って、パラシュートで降下して、われわれの力で朝鮮を解放するんだと、このようなことを夢見て頑張っていた。そうした人々がいました。同時に当時中国で日本に対する抵抗闘争、武装闘争を展開した後、苦境に追いやられて一時ソ連に避難していた金日成部隊というのが、朝鮮の解放に向けて待機をしていたわけです。

まさに日朝国交正常化という課題をですね、ここで思い起こすべきでしょう。ある意味とても象徴的なんですけれども、この日本の植民地化に対して、戦って独立を勝ち取り、民族の自由を得るんだというのが朝鮮人のパルチザン、その指導者だった金日成の目標だったわけです。その金日成部隊の目標というのが建国後の朝鮮民主主義人民共和国の目標ということになっていき、それは日本ではなくてアメリカに対する抵抗ということになったわけですけども、日本とも和解せず、アメリカとも和解できずに今日を迎えているわけです。

したがって、今日でもしばしば抗日遊撃隊の精神でというようなことが、共和国で語られるというのは、やはりこの国が日本の植民地支配からの自由、独立後は米国の侵略からの自由ということをつたってきたということの象徴であろうかと思います。

もちろんそこには、冷戦というものがあります。戦前と戦後の構造は違います。戦前は植民地支配であり、戦後は冷戦下での対立でしたから、これを一言で同じには言えませんけれども、しかし、私たちがこの朝鮮半島と日本を考えると、やはり今日のタイトルですけれども、原点というのが日本と朝鮮の間違った近代の出会いのためだったといわざるをえません。その正すべき原点は、1910年の韓国併合、朝鮮の植民地化ということです。

ですから、まさに100年目の年に、私たちが日朝国交正常化ということを進んで、そのプロセスの中でいろいろな懸案、これは当然ながら在日朝鮮人の人権もあり、そして拉致の問題が合理的な形で解決されるということもありますが、解決に取り組んでいくべきなのです。

それを何か政治の道具にしてやるということではなくて、本当の意味で人々の人権とか、あるいはお互いの国の未来のためにプラスになるような形での、私たちの2010年というものを勝ち取っていくために、これから岡山の皆さんとともに私も頑張っていきたいと思います。

今日は、ありがとうございました。

閉会あいさつ

(司会 森本)

限られた時間でございましたけれども、詳しく講演をしていただきましたことを感謝申し上げたいと思います。

予定しております時間より若干まだ早いので、もしも皆さん方のほうで何かご質問等があれば、お受けしたいと思います。

あらかじめ最初からそういうことを言うておりませんでしたから、考えておられない方もおられるかもしれませんが、もしもあればと思いますけれども、どなたかおられますか。

今まで、これだけ系統的にといいいますか、歴史を直視する、しかも日本が何を行ったのかという、過去の歴史を直視するということで、それぞれの立場の皆さん方が、それぞれの立場で聞かれたと思いますけれども、この歴史の今日話をいただいた中身について、共有化をしたい、みんなのものにしたいなというような思いがあったものですから、あえてこういった企画をご披露させていただきましたけれども、それについて何か。

例えば、進める会はこうあってほしいということも、何でもよろしいですけれども、あればお願いしたいと思います。

よろしいですか。

大変重苦しい内容だったかもわかりませんが、いずれにいたしましても、我々が学校で習わなかったと、教えてもらえなかったと、お祖父さんや、曾祖父さんを含めまして、自分達の家族の中からも、あえて口を閉ざしておったということもあったのではないかなという感じがしておりますけれども、歴史の事実というもの、やはり正面から見ていく勇気を、我々自らが持つていく必要があるのではないかなと。

そのことを乗り越えていくことによって、民族という言葉がいいかどうかわかりませんが、日本人の我々としても世界に誇れる国家、国づくり、社会づくりができるのではないかなと。

その第一歩ということで、今日のご理解をいただけたらありがたいかなということを申し上げます、質問はないということでございますから、石坂先生にあらためて拍手でお応えをさせていただきたいなというふうに思います。

(拍手)

それでは、時間を私ども 8 時10分から15分ぐらい実は思っておったんですけれども、最後に閉会の挨拶ということで、きわめてユニークなといいいますか、すばらしいキャラクターの持ち主で、この進

める会を10年間、生み、そして育てていただきました、前代表の井本丈夫先生に思う存分思いのたけを、限られた時間ではございますけれども、行っていただければなというふうに思います。

拍手でお迎え下さい。

(拍手)

(井本顧問・前代表)

それでは、司会者の配慮をいただいて、閉会の辞を述べさせてもらいたいと思います。

先生、わたしはなんかあんたは俳優と思うたんですわ。どこまでどうなっとなじやろうかと、俳優に來てもろうて先生の話の話を聞くというのも、何かとこう思うとったんです。

わしゃ、ご無礼したと思います。

今日、先生のお話を聞いてですね、あらためて日本がどのような姿勢で、韓国というか、朝鮮半島に対して、対応してきたかということがわかりました。

私もこの友好を進める会を立ち上げてからは、お互いが朝鮮というものを十分知らなきゃならんと。そういう時に、小泉と総書記が首脳会談をして、それでこれはええことをやったぞと、こっから新しい日本の歴史が芽をふいてくりゃあせんかと、こう真剣に思いました。

しかし、日本の政治というのは少々の頭じゃあありゃあしません。本当にこのままでは隣国と、例えばこの間、宮沢さんが行った時に、温家宝さんが金正日総書記と逢うたりして、とうとう自分達の行きたいところをですね、思うように行かせてくれなんだという話を聞いたんですわ。

しかし、中国と朝鮮、あるいはアメリカが朝鮮に対して変わった姿勢で望んできていると、私は思うんです。ですから、やっぱり私らもまだ力が足らんとというか、本当言ったら、小泉総理がですね、街頭へ出てこういうことなんだと。お前なあ、わしらがやること何かおかしいように思うけれども、こういうようにというそういう大衆にしなきゃあならん。こういうように思っておるわけです。

ですから会場の皆さん、寒い中よう来いつかあさった。こんなにたくさん来てくださるとは、思うとらんかったろ。そうじゃろ。

こういうようなお方が、少しでも状態を把握してくださって、そしてわしらで何かできることはないかと、お互いの幸せを守るために何かをやろうじゃないかと、そういうように、一つお力をお貸し願いたい。

先生が安い…、そういうことを言うたらいけんなあ。東京のほうから来てくださると、そのお気持ちにお報いする道だと思います。

今日は本当にありがとうございました、先生。

(拍 手)

私もね、85です。

それでご覧のように、杖をついてうろうろしようりますが、まだまだ負けりゃあせんという気持ちを持っております。

どこまでうまいこといくかわかりませんが、今33万出して電動車、電動車をかって、できるだけ近くへはそれに乗ってな、役場へ行ったりしております。

皆さんのところへ、「ありゃ、あれが死んだで」というような通知は、まだ当分行かんと思いますので、あんまり期待せんようにしてください。

いや、ご無礼しました。

(拍 手)

(司会 森本)

愛のある井本節を耳にされたんで、皆さんも安心されたんじゃないかと思えますけれども、進める会を本当に10年前、というよりもっと前から岡山県内で、超党派で何かできることはないか、できるところから始めようということで、実は十数年前からの構想が、10年前に実現をしたということです。

8頁に、ご覧いただければわかりますように、政党的には自民党から共産党まで、すべて政党の皆さんが参加をさせていただいておりますし、あるいは、学者、文化人であるとか、経済界の経営者の皆さんであるとか、労働界であるとか、いろんな各界、各層といたしますか、幅広い形でこの進める会ができたというのも、井本先生の本当にご尽力があったおかげだというように思っております、進める会の三つの柱がございますので、あらためてご紹介したいと思うんですけれども、一つは、先程来言っておりますように、日朝の国交正常化をとにかく早くしていこうというのが一つです。

もう一つは南北の自主的平和統一。朝鮮半島は一つの民族だ、したがって自主的に誰からも命令されたり、指示されたりするのではなくて、自主的に平和統一を願いたい。

三つ目が、在日同胞の皆さんの権利の拡大といたしますか、特に教育問題。今度の民主党中心の政権になりましたけれども、例えば、学校問題一つを取り上げましても、文部科学省がきちっと認定をした学校ではない。したがって、県とかあるいは市町村の助成といたしますか、そういったものも非常に少ない。特に岡山県は全国で下から数えて1番か2番というようなことも実はございまして、そういうことも含めて文部科学省との関係も、これから大事になってくるのかなあと、そうした外堀を埋めていきながら、日朝国交正常化を早期実現をしていく、今日はその事務局長の石坂先生をお呼びさせていただいたと。

こういったような思いもございまして、長いことかかってきたわけでありましてけれども、もうそろそろ、井本先生が元気なうちに、国交正常化の具体的な段階に入っていけるように、それまで井本先生は達者でおらなければいけませんので、90になろうが、95になろうが、100になろうが、とにかく頑張っていたきたいということも申し上げまして、だいぶ時間が来ました。そろそろ終わりにしたいと思います。

本当に進める会になりまして、日頃からたいへん暖かいご理解とご支援、ご協力をいただきましたことを、あらためてお礼を申し上げまして、本日の講演会を終わりにしたいというふうに思います。

ありがとうございました。